

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>			<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実（学力向上） 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実（卒業後を見据えた生きる力の育成） 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成（心身の育成） 4 幼児児童生徒に対する指導の充実を図るための更なる学校業務改善の推進</p>		
<p>年 度 当 初</p>							
<p>評価項目</p>		<p>評 価 結 果 (2)月</p>		<p>評 価</p>			
<p>確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実（学力向上）</p>	<p>(幼) (1)体験的な活動を通して様々な事象に興味や関心が持てるような環境や機会を設定する。</p>	<p>(1)きこえにくさにより、情報量が少なかったり興味や関心が広がりにくかったりする傾向にある。</p>	<p>(1)身近な事象に積極的にかかわり、気づいたり、考えたりする。</p>	<p>(1)個々の幼児の実態を把握し興味や関心が持てるような活動を設定する。 (1)具体物や絵、写真などを補助的に使い、内容の理解を促す。</p>	<p>(1)校内での行事に加え遠足や学校周辺の散歩を実施した。自然の中での様々な体験を通して幼児は発見をしたり興味を広げたりすることができた。 (1)活動の振り返りとして絵や写真を使って話し合うことで内容やことばの理解が深まった。</p>	<p>A (1)幼児の実態に即した活動内容と実施方法を工夫する。</p>	
	<p>(小) (1)基礎学力が向上するよう、語彙を拡げ正しく使うための支援の工夫に努める。</p>	<p>(1)学びを深める発問の工夫により、自分の考えを答えられることが増えた。しかし、語彙数の獲得が不十分であり言語概念の形成等に課題がある。</p>	<p>(1)生活ことばから学習ことばを正しく身につけ、それを用いながら主体的に学習に取り組む。</p>	<p>(1)実態に合った検査を実施したり、学習記録を見直したりして的確な実態把握を行い、学部で共有する。語彙数の拡大や言語概念について、学部研究を通し学習内容や支援方法の検討や実践を行う。</p>	<p>(1)実施予定の諸検査を実施し、結果について学部教員間で情報共有し本年度の評価及び課題の検討を行った。授業研究会もを行い、語彙の拡大にむけての支援や指文字の指導時期等について方向性を確認できた。児童一人一人は、学習ことばを使う姿勢がそれぞれにみられてきている。</p>	<p>B (1)本年度作成中の各教科で押さえない語彙をまとめた語彙表の活用について共通理解を図る。</p>	
	<p>(中) (1)目標を持ち、知識や技能を身につけようと意欲的に学習する態度の育成に努める。 (2)実態把握に基づく支援方法の共通理解と考える力を育成するための支援の工夫に努める。</p>	<p>(1・2)学習状況が様々であり、個に応じた丁寧な指導をすることが必要である。苦手な教科に、意欲的に取り組もうとし始めた生徒もいる。</p>	<p>(1・2)授業の中で、自分の考えを説明できる。 (1・2)学習に出てくる基礎的な言語を習得する。</p>	<p>(1)生徒自身が自分の考えを説明できるような雰囲気づくりや視覚的支援、発問の仕方等の工夫をする。 (2)適切なコミュニケーション手段を使って、言葉やその言葉の背景となる概念を伝える。 (2)諸検査等の結果や行動観察、各教科の状況等について、情報を共有し、実態把握や共通理解を行い、一貫した支援を行う。</p>	<p>(1)総合的な学習の時間や自立活動において学部全体の場でも自分の考えを自分の言葉で伝えられる生徒が増えてきた。 (2)それぞれが適切なコミュニケーション手段を使って、言葉やその意味等を少しずつ理解しようとしているが、個人差がある。</p>	<p>B (2)適切なコミュニケーション手段を使うことで、どの程度言語が身についたかを各教科で小テストなどをして確かめる。</p>	
	<p>(高) (1)日々の学習での進路意識を高める指導と進路希望に応じた教科指導の充実を図る。</p>	<p>(1)進路を意識し意欲をもって学習に取り組んでいる生徒、家庭学習の提出や学習時間の確保に課題のある生徒など実態は様々である。日々の授業を活用しながら、指導方法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。</p>	<p>(1)基礎学力や思考力が向上し、自ら学ぶ方法を身に付け継続して学習できるようにする。</p>	<p>(1)個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通理解する場面を学協会やケース会議、学部研究会などで設定し、課題に応じた指導や支援を行う。 (1)生徒の基礎学力や思考力を高めるために、授業における指導方法について研究を進め、工夫について共有する。 (1)諸検査や日々の情報交換をもとに生徒の実態を把握し、生徒一人一人の進路実現を目指した授業を設定する。</p>	<p>(1)一人1授業の取組の中で、生徒の特性や課題について話し合い、指導に生かすことができた。 (1)学部研究やケース会議にて課題や指導方法を共有して指導を行うことができた。</p>	<p>B (1)他機関につながる体制を作り、必要に応じて適したアセスメントを行い、教師間で共有し指導に生かす。</p>	
<p>自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実（卒業後を見据えた生きる力の育成）</p>	<p>(支) (1)乳幼児教育相談で保護者に子どもとのかかわり方について支援するよう努める。 (2)通級による指導で、自分のきこえの理解を促し社会参加に向けて望ましい態度を育てる。 (3)個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 (4)聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。</p>	<p>(1)きこえやことばの育ちだけでなく、子どもへの接し方について不安があり支援が必要な保護者が多い。 (2)きこえにくいことに気づきにくく、気づいていても、その困り感を主体的に改善したり軽減したりしにくい。 (3)聴覚障がい教育に初めて関わる地域の学校の課題意識が少なく研修会や情報交換会への参加が全くない学校がある。 (4)医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っているが、地域への理解啓発が不足している。</p>	<p>(1)保護者が子どもの気持ちに寄り添いながら楽しみながらかかわるようになる。 (2)きこえにくい場面があることに気づき、困り感を訴えたり適切な支援を求めたりしようとする。 (3)難聴や発音に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 (4)関係機関や地域と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換をし、よりよい支援を行っている。</p>	<p>(1)保護者の不安を軽減するため、担当者が保護者のニーズを把握し、かかわり方のモデルを示す等、支援方法を具体的に示す。 (2)児童生徒の思いを受けとめたり、担任や保護者と情報を共有したりして、日常生活でのきこえの状態を把握し、適切な指導、支援につなげる。 (3)難聴学級への児童生徒への支援を充実させるため、年に2回程度の参観を実施する。また、相手校からの要望に応じて研修や理解学習を行う。 (4)本校支援部の活動を理解してもらうため、園長会や保健師、特別支援教育主任の集まりに参加し昨年度作成したDVDを活用する。 (4)理解啓発のために、社会福祉協議会や公民館等に案内を配布し、難聴体験など本校ができる活動を周知し、活用を促進する。 (4)個人の耳鼻科医や校医（耳鼻科）との連携が深まるように訪問をする。</p>	<p>(1)教育相談で紹介した遊びや手話を家庭でもいかしておられる保護者が多くあった。配布したノートに気づいたことを書いて相談に持参される家庭もあり、子どもの今の姿や課題の共通理解を図ることにつながった。 (2)補聴器や人工内耳の故障または紛失を想定し、その対応方法を考える学習を行った。児童生徒は、きこえにくい場面や困り感が生じる場面をイメージしたり実際困った時に支援を求めたりすることができるようになってきた。 (3)地域の難聴児の支援を充実させるために、年2回程度と考えていたが、実際には1回しか参観できなかった。しかし、要望があった学校には丁寧に対応できた。 (4)保育園や保健師に対してことばの研修依頼があり、DVDを活用することができた。 (4)県立中央病院の訪問は、コロナ禍でもやっとなされたが、他の病院は難しかった。</p>	<p>B (1)保護者ノートの形式等を改善し、保護者と子どものかかわりを支援するために今後も活用していく。 (2)実際の生活場面で自分から支援を求められているか、担任や保護者から様子を聞くなどして今後も連携をとっていく。 (3)地域の難聴児の支援として、担任、保護者を交えての会がもてるように働きかける。 (4)今年度、つながりができた保健師とはさらに充実した支援ができるよう連携を図る。 (4)個人病院への訪問は必要なので、状況を見ながら進め、連携をとる。</p>	
	<p>(幼) (1)様々な人とかかわる場を設定し、かかわり方を支援する。</p>	<p>(1)友だちと一緒に遊んだり話しかけたりしたい気持ちはあるが、消極的になりがちである。 (1)周りの人の様子を見て、補聴機器の有無に気づき始めた幼児がいる。</p>	<p>(1)幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。</p>	<p>(1)自分の思いが相手に伝わる経験を増やすため、教師がコミュニケーションの仲立ちをする。 (1)相手に合わせた伝え方ができるよう教師がモデルを示したり、手話を付けるよう声かけをしたりする。</p>	<p>(1)人数を制限して幼児とかかわりのある他学部の児童生徒や教師に学部行事への参加を依頼した。教師のしえんを徐々に減らし、幼児が自信を持ってやり取りする姿が見られた。</p>	<p>B (1)校内での人間関係を広げたり深めたりできるような環境設定をする。</p>	

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初			評 価 結 果 (2)月		
		現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策
	(小) (1) 基本的な生活習慣の定着を図り相手を思い合うとともに、社会参加にむけて望ましい習慣や態度を育てる。	(1) 学習規律や生活上の様々なきまりやルールについて自ら守ろうとする姿が見られる。一方で、自分に都合のよい判断のみで行動してしまう場面も見られ、場面に応じた指導が必要である。	(1) 相手のことも考えながら学校内外のきまりやルールを自ら守ることができる。	(1) 場面を捉え、とるべき言動について児童と振り返るようにする。また、ロールプレイ学習やSSTを活用し、適切な言動について考えを深めるようにする。	(1) 「ソーシャルストーリー」や「感情認識トレーニング」等を少しずつ取り入れたり、振り返りの時間を確保したりすることで、望ましい習慣や態度の定着を目指してきた。子どもたち同士のトラブルが減少し、相手の考えや思いを意識した発言が聞かれるようになってきた。	B	(1) 「ソーシャルストーリー」や「感情認識トレーニング」等に関して教職員の研修機会を増やし、学部で共通理解をしながら効果的な指導を行っている。
	(中) (1) 自分の障がい等を理解し、自己肯定感を持ちながら自分の課題を克服しようとする態度の育成に努める。 (2) 学校生活や社会生活をよりよく送るためのソーシャルスキルの向上を図る。	(1・2) 自分の障がい等についての理解が十分に進んでいない生徒もいる。自己肯定感が十分に育まれておらず、自発的に行動することに課題を持つ生徒もいる。	(1) 自己理解が進むとともに、自分なりの課題解決方法がわかり、それを実践しようとしている。 (2) 自分なりの考えや思いを持ち、相手や場に応じた受け答えをすることができる。	(1) 自分の障がいを理解し、自分の良さや課題や必要な支援を知る学習や支援を行う。 (1) 課題解決方法を教師と一緒に考え、実践する場面を設定する。 (2) 様々な集団活動を通して、他者の考え方や意見を知る場を意図的に設定したり、日常生活の中でも使えるように社会生活に必要なマナーやルールについて学び、実践する場面を設ける。	(1) コミュニケーション手段・情報保障などの学習を通して、自分のことや他者の状況を互いに理解する活動を積み上げた。 (1) 各教科や生活の中で起きた出来事に対して、教師と一緒に課題解決に向けて考える場面が多々あった。 (1) (2) 自分にとって必要な支援等を知り、それを訴えることができる生徒もいるが、全体的に他者理解が不十分である。よって、相手の気持ちを考えたり相手や場に応じた受け答えができるまでには至っていない。	C	(1) (2) 相手の気持ちを考えたり相手や場に応じた受け答えができるよう、SSTやロールプレイ、日々の生活で起きることを捉えて指導していく。
	(高) (1) 自立と社会参加をめざし、あるゆる活動を通して、主体的に考え行動できる力を培うための指導の充実を図る。	(1) 高等部卒業後の進路については方向性がほぼ決まり、具体的な手続等進めていく必要のある生徒もいる。社会参加に向け、時や場に応じた言葉遣いや行動について課題を持つ生徒もいる。	(1) 将来の社会生活を意識し、規律（時間・言葉づかい等）を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 (1) 社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。	(1) 生徒が課題意識をもって生活できるように、生徒の課題について全教職員が共通認識した上で、指導を徹底する。 (1) 現場体験学習や職場見学、先輩の話を聞く会などを実施し、進路を意識づけるとともに、社会参加に向けて必要な力について考える機会を設定する。	(1) 現場体験学習での評価をもとに社会参加や進路実現のための課題や解決方法を考え、実践した。 (1) 新型コロナウイルス感染症予防のために先輩の話を聞く会や大学見学はできなかったが、生徒の進路や実態に応じて適宜職場見学や体験を行い、卒業後の進路について考える機会をもつことができた。 (1) 個に応じた支援を行うことはできたが、進学や就職に必要な情報を共有することについては、さらに検討を進める必要がある。	B	(1) 進路を決定するまでの必要な指導について、担任だけでなく学部内でも共有する機会を増やす。 (1) 卒業生の姿から、卒業までに必要な力について知る機会を持つ。
心身の健康と豊かな自己表現力の育成 (心身の育成)	(幼) (1) 感じたことや考えたことを相手に伝えたり表現したりする力を育てる。	(1) 自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟であったり、経験に伴う言葉の定着が不十分であったりする。	(1) 幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。	(1) 朝の会で幼児の興味関心に沿った話題を取り上げ、伝え合う楽しさが感じられるようにする。 (1) 言葉による正しい表現方法の定着を図るため、幼児の思いを押し量り拡充模倣を促す。	(1) 絵日記や絵本などを活用して幼児の思いを確かめ、新しい表現方法の獲得や拡充ができるようにした。幼児からの表出が増えたり、正しい助詞を付けて伝えたいことが話せるようになったりした。 (1) 授業研究会を通して日本語の獲得の道筋を確認し、日々の実践に活かすことができた。	A	(1) 家庭と学校が幼児についての情報共有を密にし、絵日記や意識した言葉かけの習慣化を図る働きかけを工夫する。 (1) 学部内で情報共有し個に応じた指導や支援を継続する。
	(小) (1) 友だちや教師との活動を通して自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の話を最後まで聞き、理解したりできる力を育てる。	(1) 休憩時間等、子ども同士で自分の意見を伝え話し合いをする場面が増えてきている。自分の思いが強く、友だちの話を最後まで聞くことができなかつたり、話し合いがまとまらないときになかなか解決できなかつたりする場面も見られる。	(1) 相手に自分の経験や考えを正しく伝える。また、相手の話を最後まで聞き、内容を理解しようとする。	(1) 地域の人々など様々な交流の場では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等のルールを事前に確認する。また、学級活動や児童会活動等の集団での時間において、友だちや教師と伝え合う活動を設定し、視覚的なツールを用いる等個別の支援を工夫して行う。	(1) 居住地交流やリモート等を活用した学校間交流を実施したり、校外学習を行ったりする中で、自分の伝えたいことを相手がわかるように伝える工夫や相手が伝えたいことを理解することの経験を積むことができた。 (1) 児童会の活動の中で、定期的に目標を話し合ったり、振り返りを行ったりする機会を設けることで相手のことを考えてして聞く・話すことへ意識が高まった。	B	(1) 交流に向けた事前学習の工夫をする。 (1) コミュニケーションをとる時の約束・ルール等についての確認を定期的に行う。
	(中) (1) 日常生活全般を通して、話す意欲と表現力の向上を図る。	(1) 自分の思いを相手に伝えることについて苦手意識のある生徒もいる。 (1) 周りの状況を把握して行動することに課題がある生徒もいる。	(1) 人前で自分の思いを相手に伝えようとしている。 (1) 相手の立場を考えた言動ができるようになる。	(1) 自分の思いの伝え方について特設自立活動（アサーション等）等で学習する機会を持つとともに、日々の生活の中で指導する。 (1) 集団学習（活動）において、自らの行動を客観視できる機会を持ち、どのように改善すべきかを考える場面を設ける。	(1) 引き続き、帯自立活動では日本語や手話言語の学習を積み重ね、コミュニケーションの基本となる言語の形成を図った。そして、その言語に基づいたコミュニケーション力を伸ばすために自立活動や総合的な学習の時間では話し合い活動の機会を多く設定した。話し合い活動では、少しずつ、自分の言葉で思いを伝えられるようになってきたが、日常生活の中では自らの行動を改善するまでには至っていない生徒もいる。	B	(1) 引き続き、自分の気持ちを確認する学習や自分の気持ちを表現する方法を学ぶ機会を設定するとともに、自分の行動をどのように改善すべきかを考える場面を設ける。
	(高) (1) 言語力・表現力・コミュニケーション力の向上を図る学習活動の充実に取り組む。	(1) ほとんどの生徒のコミュニケーション手段は手話、指文字、身振り等であり、指示だけでなく実際に体験し確認をすることが必要な生徒もいる。 人と関わることを好む生徒が多いが、適切かつ積極的なコミュニケーションには課題も多い。	(1) 交流や現場体験学習等で相手や場に応じて、積極的かつ適切にコミュニケーションを取ろうとする力が向上してきている。 (1) 自立活動や弁論大会などを通して、自己表現力が向上している。	(1) 相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるように、事前に具体的な場面を想定して練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 (1) 自立活動などの時間を活用し、状況に応じた日本語の使い方や意味の学習を積み重ねることを通して、一人一人の日本語力を伸ばす。 (1) 弁論大会など発表できる場を設定し、自己表現力を高められるようにする。	(1) 現場体験学習で自分の聞こえについて理解を求め、場に応じた手段でコミュニケーションを取ることができた。 (1) 新型コロナウイルス感染症の影響で直接交流はできなかったが、ビデオを通じて手話で丁寧に表現する機会を持つことができた。	B	(1) 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、今後も交流の在り方を考えていく。

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%） C：変化の兆し（60%） D：まだ不十分（40%） E：目標・方策の見直し（30%以下）